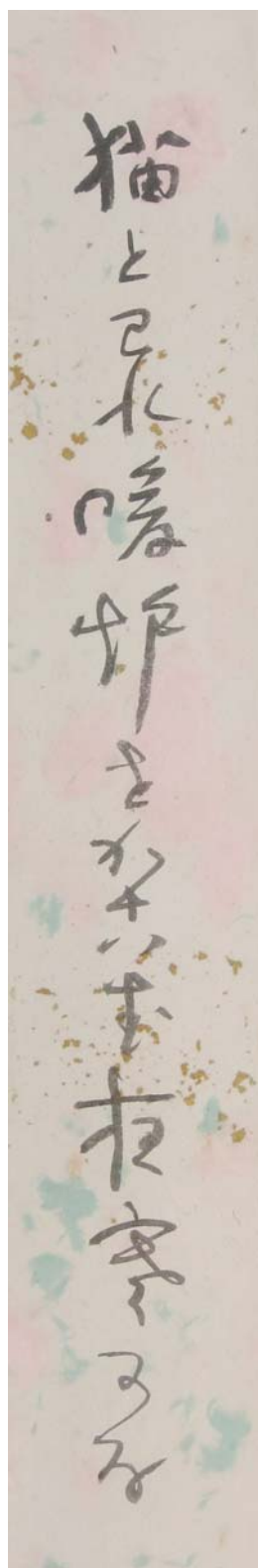


企画展

哲学者の エッセイ 随筆

くだらぬことながら書きつけ置き

昨年の大掃除の日、何処からとなく一匹の猫がはいって来た。胴は少し長過ぎたが、虎猫の毛色が美しいので、家に飼って置いたのだ。生れてまだ一、二月もたたぬ子猫であったが、この頃はもう徴兵適齢に達した一人前の青年格で、中々の愛嬌者であった。朝は人の起き出た床の中にもぐり込んで、頭を出してねて見たり、昼は秋の日光が深く入り込む縁側に転りねていて人の足にざれ付いたり、食事の間はいつも飯櫃の上に座って人の食事を監視している、さなくば飯台の傍に背を向けて坐っている。娘は画を描くが、別に私と共通の話題というものがないので、いつでも猫の一举一動が話題の中心となり、時ならぬ笑の波がそれから起って来る。ちょうど静かな森の中の池に何処からとなく小波が起るようだ。（「燗炉の側から」）



猫とわれ暖炉をかこむ夜寒かな

平成二十八年二月二日〜六月二十六日

石川県西田幾多郎記念哲学館

開館時間 ■ 9:00 ~ 17:30(入館は 17:00 まで)

休館日 ■ 月曜日(祝日の場合は翌平日)、年末年始、メンテナンス期間

観覧料 ■ 一般 300 円 / 高齢者(65 歳以上)200 円 / 高校生以下無料

〒929-1126 石川県かほく市内日角井 1

TEL(076)283-6600 FAX(076)283-6320

URL <http://www.nishidatetsugakukan.org/>

E-mail nishida-museum@city.kahoku.ishikawa.jp

交通アクセス

【車 利 用】北陸自動車道[金沢東 IC]-国道 159 号線(約 20 分)
のと里山海道[白尾 IC]-約 5 分

【JR 利 用】金沢駅-七尾線(約 25 分)-宇野気駅-徒歩(約 20 分)-哲学館



企画展

哲学者の 随筆

エッセイ

くだらぬことながら書きつけ置きて

平成 28 年 2 月 2 日 [火] ~ 6 月 26 日 [日]
石川県西田幾多郎記念哲学館 2 階展示室

西田幾多郎は多くの哲学論文を書きましたがそれ以外に随筆と呼ぶことのできる短い文章も数多く残しました。一言に随筆といっても哲学・思想をテーマにした小文から随想、追憶、文芸批評の形を取ったものまで様々な内容があります。こうした多様な随筆に共通する特徴は何かあるのでしょうか。それらは哲学論文とどう違うのでしょうか。

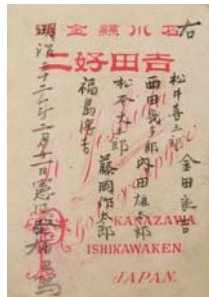
学術的真理を論述する学術論文とは違い、その時々
の想いを書きつけ、残すという点に随筆というもの
の特徴を見ることが出来るかもしれません。その想
いは多くの場合、書き置くことがなければすぐに消
えてあとに残らないものです。西田幾多郎は明治 40
(1907) 年に 5 歳の娘を亡くしました。幼子はこの世
で何もなしてはいない。その死に対して父親が感じる
痛み以外に何も残してはいないのです。幾多郎は「く
だらぬことながら」と断っていますが父親がその想
いを忘れたくないと願い、文章に残すことはきわめて
自然なことに思われます。

本展では西田幾多郎が書いた、それぞれ特徴的な
形式の随筆を四つ取上げ、残された言葉と残された
物を展示します。そこでどのような想いが書き残され
たのか、ご覧いただけます。

■山本晁水君の思出



四高の仲間と明治憲法発布日に撮った写真
明治 22(1889)年 2 月 11 日
裏面幾多郎直筆の署名



■「国文学史講話」の序



藤岡作太郎著
『国文学史講話』初版本
明治 41(1908)年 開成館
(金沢大学附属図書館蔵)



藤岡作太郎(東圃)

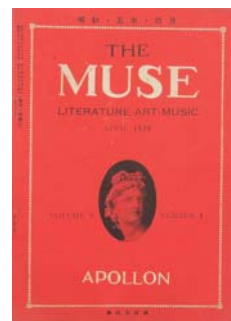


『北辰会雑誌』第 51 号
明治 41(1908)年
第四高等学校北辰会
(金沢大学附属図書館蔵)

■暖炉の側から



『The Muse』第 10 卷第 1 号
昭和 5(1930)年
京都 アポロン社



ハーディ『ダーバヴィル家のテス』
西田幾多郎蔵書

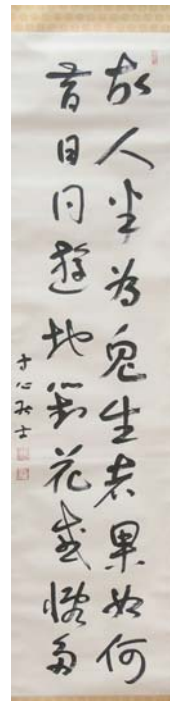
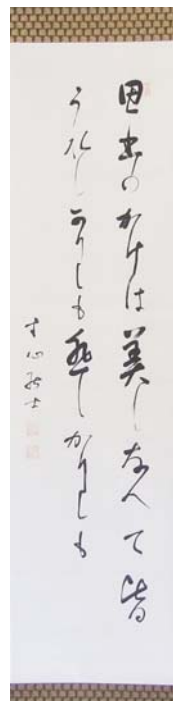
■フランス哲学についての感想



『思想』第 176 号
昭和 12(1937)年、岩波書店
(金沢大学附属図書館蔵)



ベルクソン写真 Dornac, パリ
西田幾多郎所持品



故人半為鬼生者果如何 昔日同遊地对花感慨多
寸心居士

思出のかけは美しなべて皆うれしかりしも悲しかりしも
寸心居士